

浄土

1989-3

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省特別投函承認雜誌) 第三二五号
平成元年二月二十五日印刷 平成元年三月一日発行
第五十五卷 三月号



平成元年

“春”

小林



三月の秀句

雪消水光琳瑯に奏でをり

富安 風生

まさをなる空よりしだれざくらかな

富安 風生

月日過ぎただ何となく彼岸過ぎ

富安 風生



三月号



是のごとき諸の上善人の俱に一処に
会することを得ればなり。

——『阿弥陀經』

目 次

〈ずいそう…「つくづく法師抄」〉

春の彼岸に想う……………眞 野 孝 信……(2)
——どう生きる——

《彼岸会法話》

ころろ——応無所住而生其心——……………原 口 正 弘……(8)

《特別寄稿》

存統上人の「閻浮提図付日宮図」の問題点…後 藤 真 康……(15)
——宗教と科学のはざままで——

読者のページ

法然領解——文章論——……………大 橋 賢 一……(23)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <24>

海と山の狭間で……………木 下 隆 一 ……(30)
——我が思い出に住む犬たち(10)——

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(3)……………松 浦 行 真……(37)
——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

◇◇ずいそう……「つくづく法師抄」◇◇

春の彼岸に想う

——どう生きる——



眞野孝信

(八幡市正法寺住職)

吾が国では、「春分の日」を希望の日とするが、季節の上からも、三月に入ると、三日の雛祭ひなまつりをはじめ、五日は啓蟄けいちと称し、二十四節期の中で冬籠ふゆこもりの虫の這い出る日を意味し、古来より「暑さ寒さも彼岸まで」と云い伝え、気候不順な歳にあっても、余寒も去り、

一陽来福、春の訪れを告げる温暖の気を感じる日が多くなると共に、陰暦の弥生やよひの字義からも、弥生やよひ(いやおい)として、草木がいやが上にも生えしげる季節である。

春分は、秋分と共に昼夜等半の日であることから、国民の祝日に関する法律にも、この

日を「自然をたたえ、生物をいつくしむ」と意義づけ、この日から次第に昼間が長くなつて、大自然が若々しく精気を出す時であるから、その生命力をたたえ、すべての生物をいつくしもうとすることは尊いことで、名実共に「希望の日」に相応しい。

かつては、明治の太政官達をもつて祭日と定め、「春季皇霊祭」として宮中の儀式の日を国家的祭日としてあつたが、新祝日の制定には無関係となつた。

仏教寺院に在つては、平安時代の初期から、国分寺に於て「金剛般若経」の転読された法会が、わが国で行われた彼岸会の始まりとされている。そして鎌倉時代になると、彼岸会には「滅罪生善、後生菩提」を祈る懺法（懺軌に準じて、懺悔すること）を修す法会が行われ、鎌倉時代後期からは、彼岸の行事として祖先や先亡者の追善法要が一般化して今日に

及んでいる。

彼岸と云うのは、原は梵語波羅蜜多の訳で、波羅は「彼岸」蜜は「到」の意とされ（大智度論）、又「生死を此岸と為し、涅槃を彼岸と為し、煩惱を中流と為す。」（名義集）等、これに關係して記された文献は多いが、ともかく、パラミッタ (paramita) の音訳で、大衆の救済を目的とする実践行で、その徳目即ち六度万行（布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、の六波羅蜜行）を修して、「諸惡莫作、衆善奉行」（諸の惡事を作さず、衆の善行を修すること）に つとめ、迷界を離脱して悟りの境域に「度る」修行こそが、この目的とされたが、このことを、浄土教の思想とその信仰特に浄土宗では、「厭穢欣浄」即ち穢土を厭離して浄土を欣求する「願往生の念仏」を根底に、この功德を、崇祖報恩の誠を致し、更にはこれを一切の精靈に及ぼし、自らは生命のかぎりを

三心具足 (①至誠心—真実心、②深心—己がうつわを信じ、阿弥陀仏の大慈悲を信ずる心、③廻向発願心—全てを願往生の為にふりむける心) 則ち、ひたすらに、どうぞと救いを請う一向専修の称名の日暮しに生きることの「決定心」(ゆるぎなく一途な心)を持って、畢命を期す信仰強化の日とするのである。(詳細は、拙述『浄土』五十四巻九月号を参照下さい)

つくづく思うに、長寿時代の到来／せつかく享けた(さつかる意)一期の命、その長命は喜ばしいことではある。然しその寿命をどう生き遂げるか? 人それぞれに想いは多様で、一概にこれを論じ得ないことではあるが、私は、テレビのコマーシャルで、プロ野球界の有名な西本幸雄氏が、「登板する時よりも、降板する時に、大きな拍手を受ける投手が、ほんとうの大投手だ」とおっしゃる一駒を視る毎に、素晴らしい達見と、聴く人をしてそ

れぞれの立場に対しても、示唆する名言と思うのであるが、私は人の生涯こそ、そのようであり度いものだと思うのである。

恩師椎尾弁匠先生(大僧正、文学博士)は、「葬式は人生の凱旋式である」と。案ずるに人は誰でもその生涯の足跡をその人らしく遺しての終焉であるから、遣った縁者が、故人の足跡を回想し、その人を思慕し、或は惜別の情をもつて、その人が人界の営為を終結し、爾後は往生浄土の素懷(平素の願い)を遂げ、浄域に超生されることを念じるのであるが、悔なき臨終を迎えるために、どうすればよいのか。この問題が、「医療と宗教」或は「ターミナル・ケア」等々の問題として、特に関係者の間では「切実な問題」とされている。勿論、死の縁は無量である。老衰、病死、自殺、他殺、事故死、近代的神経症や職業病による頓死など、而も老少不定の中を、無量

の生縁に生かされて生きているのであり、無常の世を生きる貴重さ、生命の尊重を痛感すれば、せつかくの人生に希望と共に使命感の湧いてくるのが有難い。

最近では、「生涯教育」と言うことが教育界の新しい方途のごとく云われているが、日本の教育は、世界的にも高水準と評価され、益々充実する素晴らしさの中で、死に関する教育のされないことが欠点であるとの指摘がある。更めて云うまでもなく、「生者必滅」は誰もが知っている。然るに、死への準備は如何なものであろうか。所謂「生涯教育」の課程においては、必須の筈の「死の受容」を修得し、「死の納得」が期待されなければならない。ホスピス（キリスト教）・ビハラー（仏教）等の所謂臨床宗教者の施設が求められる所以は、末期患者のニーズに応じて、総合的に対応するための要人として、医師や看護婦と共に宗

教家の三者、要すればソーシャル・ワーカーを交えたチームによる役割分担の中で、精神的苦悩に対応する重要性があるからである。

吾が国では、公立病院には制約があつて、末期患者に対して、宗教家として臨床の対応に参加することが難しい為に、医師と看護婦によるターミナル・ケアの研修が必要なことから、その研修に招かれた私は、「託命の世界」——白衣の婦——と出題して話したり、看護協会の代表者研修会等にも招かれたが、地域的にも市の医師会が主催された「老と死」のパネルディスカッションにも宗教家として住職の立場で、医師会の代表者、看護婦の代表者、地域婦人会の代表者と同席して、所信を述べると共に、参加者の質問に応答したが、吾が国に於ては、宗教が一定でなく、信仰が多岐にわたり、仏教界も多宗派であるために、その応答に際しては、通仏教的立場

を余儀なくされ、私の信仰に根ざす確信の対応も、「例えば吾が浄土宗では」と前置きしての例証とせざるを得ないのが残念である。

ただ、参加者が老人ばかりでなく、中年の人にも熱心で、非常に意欲的であったことは一つの成果と言ってよく、その後、参加者の三人から自坊にお礼の電話をいただいたことで、一般に関心の高い時事であることを覚えた。

然し、家の宗旨は決まっていますが、各人の宗旨が定まらない無関心者、不定信者、多岐信者、多種混交信者、乗煽信者、屈脅信者が多く、安心の決定に乏しく起行（安心によって引き起された行為）乱れておちつかず、人生に必要な杖の役目を果たすべき信仰も、纏る度に必要に応じて変曲伸縮して用をなさず、却って荷物となり、真生の邪魔となつて、その人を迷路に入らしめる因となることも少くないのが、吾が国宗教界の欠陥であり、実情であ

る。

仏教の用途は、有意義な一期の生活を全うする為の道標である。その教えは、「生」の歡喜と充実を勧説するものである。従つてその教理は、実人生の実践に資する理論だであつて、単なる情熱的信仰や觀念（心の中に生じる考へ）ではない。深味のある仏教哲学は、宗教的実践の基幹として説かれている。

特に浄土宗の宗義は、永遠性を教示し指向しながら、現実性に立脚した人生教である。浄土往生の教は、現世における終末の、最大の不安と死の恐怖を超えて、法悦の生に安らぎと歡喜を与える教である。素直な死の受容は、各人の機根（仏の導きについてゆくことの出来る衆生とその力）対応のうつわ（人）に応じた納得でなければならぬから、その応機（対応の器）に普遍性のある教であることの必要から、浄土宗の宗義は万機普益の教義として、

宗祖法然上人は、浄土宗を開宗する必要を「吾浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生るることを示さんが為なり。……（後略）」と述べられている。

以上前述、『春の彼岸に想う』つくづく法師の随想は、浄土宗の教義を己が宗旨といただいて、今を生かされて生きる法悦の綴文であるから、——どう生きる——その方途も、一向専修、弥陀仏名につきるのである。

この拙稿にペンを運びながら、法悦境に入つて、無量寿国の帰郷を悦予し、往生の素懷を遂げられた先達のこと、眼前の紙面に透かし絵の如く去来するのを禁し得ない。

元祖法然上人御詠

称うればここに居ながら極樂の
聖衆の中に入るぞうれしき

昭和天皇御製（新聞）

夏たけて堀のはちすの華みつつ

仏のおしへおもう朝かな

九品院住職 伊藤超山僧正（三河）

急がねど旅の仕度はととのえり

迎への舟のいつきたるとも

◎「維持会員」への

ご加入のお願い!!

年会費金二万円のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊誌『浄土』刊行に暖かいご支授を賜わりたく、宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

い　こ　ろ

— 応無所住而生其心 —



原はら　口ぐち　正しょう　弘こう

故大平首相の随想に、

人の一生には悦びもあれば　憂えもある
得意あじたにふくらむ朝あしたもあれば　失意に沈む夕
べもある

栄光を浴びる舞台もあれば　辱しめに耐え
なければならぬ局面もある
禍いの根は得意の時に生じ　福の種は隠微
の間にまかれることが多い

というのがある。「悦び」「憂え」「得意」「失意」「ふくらむ」「沈む」「朝」「夕べ」「栄光」「辱しめ」「舞台」「局面」「禍いの根」「福の種」「得意の時」「隠微の間」「生じ」「まかれる」の語句がそれぞれ対句として見事にあてはまっている。政治家たる一生を終えた人の書き残した随想にみる一語一語はとりわけ味わい深い。

憂き沈みは時を変え、ところを変えてやってくる。

一年前の今頃は 私は左脚負傷のあとのリハビリに全神経を集中させていた頃であった。精神面での苛立ちもあった。その中にあって何故か自分の身体を客観的にみる事が出来る程に自分自身がとても冷静であったことを覚えてゐる。

夜は冷える時期でもあり、布団の中では自然とまだ直りきらない左足首を動かしている。

一所懸命回復に努力している我が足がいじらしい。無意識のうちに元気な右足が痛みのある左足を毛布の下で擦っている。肉親や姉弟をはるかに越える程の世話焼きをしている。

よく考えてみれば自分の足なのだから当然といえど当然のことかも知れない。その自分の足を自分の足とみていないで、恰も他人事のように客観視出来るのは不思議としか言いようがない。我乍ら誠に仲睦まじい足を持ったものだなと感心した。ペアーとはよく言ったものでまさに助け合いの精神がここにもあった。寄り添うことが出来ることは幸せである。僧侶であるが故に告別式を終えて出棺に立ち会うことが多い。これ迄は無心に合掌して見送っていたが、最近は思いを自分にこと寄せて考えるときもある。つまり自分の柩は自分で担ぐことは出来ない。果たして我身のこの世からおいとまをするときには、誰が縁あ

って我が柩に手を差しのべてくれるだろうか。と。出棺の際には、肉親親族のなかから幾人かの男性が歩み寄る。そして、そのうち柩の担い手に回るのはまさしくその瞬間の縁（はたらき）で決まる。少なくともその時その場に居なくてはならないからだ。そこにそのとき居ること自体が計り難い因縁による。仏のはからいと縁起のなせる空間がそこにある。不思議な大いなる御縁がその一点に集中して在る。まさに有り難しである。

浄土に往生することを往相回向というが、浄土を願う本当の意味は、そこで仏果（仏のはたらき）を得て利他の慈悲行を行う還相回向にある。

勢観房源智上人のお言葉の中に、

一人先に浄土に往生せば、たちまち還り来たりて、殘衆を引入せん

とある。このお言葉の中に含まれている意味をもっと広く自由に解釈することが許されるならば、とりもなおさず人の道、すべての生き方にあてはまるように思う。芸ごと、習いごと……などすべて自利と思つて励んでいくうち、いつしか利他の世界へ入っている場合がある。他人よりぬきんでようと、あるいは上達を望んで一所懸命ことに励むとしよう。その結果、努力が実つて一つのことにマスタ―する、必然的に人の上に立つことになる。若しも同じ道を歩む者を見たとき、その人は道を同じくする人にやはり手を差し延べるであらう。同じ芸に励む人が傍に居たならば、回り道はともかくも間違つた方向にだけは進まないよう正しく指導していくだろう。その人も又、先師に教わたつたのだから。利他と思つて教えていく、もうそれは自利となつて生

きている。利他即自利、人の世は共に生きていく世の中だ。忘己利他は正に慈悲の極みであり、そういう生き方が出来るよう精進を重ねたい。

いま自然を觀賞することは少ない。自然は自分を見つめさせてくれる。ときとして忘己の境地にも入っていきける。

湖畔の小舟に坐禪を組んでいたある夜半、一羽の鳥が「カアノ」と啼き、その一声を開いて大悟したという一休禪師。その一休さんに即興の詩といわれる「雁」がある。紹介すると、

一雁呼友作兩雁 三雁四雁五雁六雁
雁去雁来無限雁 雁々々々々々々々々々

一羽の雁が友を呼んで二羽となった。三四五六羽の雁、雁が行って又、雁が来る。限りが

ない。雁の群れが飛んで行く――。自然の中に佇むと自分が見えてくるにちがいない。変わりゆく光景はなにも自然だけではない。私にも大きくかわっている。ありのままに身をまかすと自分がよくよく見えてくる。余計なことに私達は執著をしていないだろうか。禅僧良寛は「花無心招蝶 蝶無心尋花」（花は無心にして蝶を招き蝶は無心にして花を尋ぬ）と詠んでいる。

昨年アルメニア共和国で大地震が起こったのはまだ記憶に新しいところだ。

そのような超大型の地震はさておくとして、夜中に突然、我が家にも大地震がおとずれたとしよう。グラッという大きな一揺れに目が覚める。そして跳び起きる。真暗闇の中で明かりを求めて壁に手をやる。スイッチまではまだ届かない。この間、机は邪魔になり、いたく足をぶつけてしまう。灰皿はひっくり返

す。飲みかけの水割りのグラスは倒れる。一段高い床の間はやたら不自然極まりない。やつのことでスイッチに手をやると停電だ。埒があかない。坐ったまましばらくじっとしている。とバツと部屋の明かりがついた。ホッと

とする。実はそれまで部屋にあった大事なものは、一度明かりが消えてしまうと周囲のすべてのものが邪魔なものばかりであった――。読者の皆さんはこれをどう受けとめるだろう。果たしてもう一度原点に戻って、本当に大切なものは何かということを考えてみるのも大事なことでないでしょうか。

つい先日、運転免許証の書き換えを済ませましたが、運転する時に必要な眼鏡はもう顔の一部になっている。がしかし眼鏡はかけているけれども、眼鏡をかけているときには眼鏡はありません。眼鏡をはずしている時には私の他に眼鏡があるのですが、一旦眼鏡をか

けると私の目の前から眼鏡は消えてしまします。美味しいものを食べている時もそうです。夢中になってお腹に入れているとき、食べている感覚をどこかに置き忘れていることがあります。「ああ美味しかった」と口にしたときはもう食べ終えたときで、本当の味わいはもうありません。テーブルの上にはご馳走がいっぱい。スープをスプーンで飲む。お皿から口へとスプーンはくり返しくり返し行ったり来たり。美味しいスープの味は悲しい哉、スプーン自体味わうことを知らない。渡し舟の船頭さんは朝から夕方まで、人を乗せては向こう岸へ運び、対岸に着いてはまた人を乗せてこちらに運ぶ。労力はきつくかつ人の命を預かる大切な仕事だ。さりとて自ら漕いで彼岸へさっさと渡ってしまうことはしない。人が先、人が先、人の為、人の為とまさに菩薩そのものはたらしきをする。

「流れる水は腐らない」という。舟を漕ぐときでもそうであるが、魚もまた川を泳ぐときには、流れに逆らっているようでも実は流れる水にうまく自分の身体を預けて泳いでいる。川の流れにぶつかり合って泳いだりはしない。流れを身を任せるが決して流されることはない。流れに逆らわず而も流されない。流されてしまつては死んだ魚も同燃である。この世に「生」をうけたからには、魚が川の流れの中にあつて泳ぐかのように「生」を全うしたいと思う。世の中の動きに対してままたらぬ我が身であるが、流されることだけはないようにしなければなるまい。

『金剛般若経』に有名な言葉がある。

応無所住 而生其心 （応に住するところなくして 其の心を生ずべし）

何ものにも執らわれない心でことに当たれ、ということである。住するとは心がそこに執らわれることである。尺八本曲の一つに『無住心曲』というのがある。

心の動揺に「いかり」がある。他人と自分が、考えを異にするからといって怒るのであれば無礼というものだろう。

聖徳太子の『十七条憲法』十条に、

忿（いかり）を絶ち瞋（いかり）をすてて、人の違うのを怒らざれ

とある。怒らなくてもよいことにカッコとなる。迷わなくてもよいことを迷っている。それが凡夫なのかも知れない。

|| 新
刊 ||

安居香山 || 著

緯書と中国の神秘思想

漢代思想と緯書、道教と緯書、
緯書の成立とその種類、
神秘思想と科学などを易しく説く。

◇ ◇ B5判・三〇〇頁・定価二〇〇〇円 ◇ ◇

《発行・発売》

平 河 出 版 社

〒一〇二 東京都千代田区隼町三一―二

TEL(〇三)二六三一四八八五 振替(東京)一一一七三三四

緯書は迷信でもなければ、異端の書でもない。

れっきとした儒教の思想の流れである。

それは、漢代の時代思想を代表し、それ以後の中国思想にも深く根をおろしているのである。

特別寄稿

存統上人の「閻浮提図付日宮図」の問題点

— 宗教と科学のはざまで —

後藤 真 康
ごとう しん こう

(東京・江東区円通寺住職、農博)

はじめに

先に存統上人作「世界大相図」の内容を中心に、須弥山世界について書かせていただいた。その際、「須弥山と極楽」(定方 展)や「仏教の宇宙」(大橋俊雄)を参考にさせていただいたが、これらの書物では存統上人の「閻浮提図付日宮図」(以下、閻浮提図)や「天竺輿地図」(以下、天竺図)についてはほとんど触れられていない。これではこれらの作品は知られざる傑作として埋もれてしまうのではないかと心配になった。ところが最近、室賀信夫、海野一隆両氏の論文「江戸時代後期における仏教系世界図」(地理学史研究Ⅱ、一九六二)

を拝読することができた。これには「閻浮提図」や「天竺図」についても詳細に記載されていた。また、「日本古地図大成、世界図編」(海野一隆、他)にも「世界大相図三幅対」の竜谷大学所蔵のきれいに彩色されたものが収録されているのを知った。これで安心もし、多くの疑問を解くことができたが、なお問題が残っている。それは「閻浮提図」の製作時期とその意義である。これは宗教と科学のかかわりについて考えさせてくれるものを持っているので、今回はこれについて少し私見を述べさせていただきたいと思う。

閻浮提図の製作年代

既に紹介したように「閻浮提図」は仏教の須弥山世界観での人間世界である閻浮提(南胆部州)を図に描いたものである。その構図はちょっと変わっていて、「立世阿毘曇論」に基づき最北端(最上部)に巨大な閻浮樹を書き、その南に七層ずつの森林と河が有って、その南に人間世界を書いたものである。人間世界の図としてはアジアを中心とした半球図に相当する世界地図がはめこまれている。七層の森林に重ねて太陽である日宮の図がある。図の周囲にはさまざまな解説がびっしり書き込まれている。

この図の発行年は図に「文化五年戊辰歳秋八月(一八〇八)」と明記されている。ところがこれには以前から疑問が持たれていたようである。それは閻浮提図の解説のなかに「如著世界大相図」という文があり、また天竺図の解説に「対照後所著閻浮提図」とあるからである。そこで、閻浮提図の製作を世界大相図(一八二二)あるいは天竺図(一八二

八)の後とする説があった。私もまたこの図の製作年代に疑問を持っていた。それはこの図に使われている世界地図の内容が斬新すぎるからである。先に一応、当時最新の図だった司馬江漢の「地球全図」が原典ではないかと書いたが、実はもっと新しい。例えばカラフトの形が実物に近いし、オーストラリアとニューギランドが分かれているのも司馬江漢より進んでいる。見れば見るほど文化七年頃に幕府が公刊した「新訂万国全図」とよく似ている。それなら閻浮提図の製作はそれ以後とみざるをえない。しかし、何か他の原図があるのかも知れないので一応保留していた。ところが、室賀氏らの論文でも閻浮提図の原図を「新訂万国全図」以後のものと見ている。古地図の大家の説なのだから間違いはあるまい。閻浮提図はやはり文化八年以後に書かれたものであらう。しかしそれが世界大相図や天竺図以後に書かれたという説は私には納得できない。他にはっきりした根拠があるなら別だが、私は閻浮提図は世界大相図に先立ち、文化年代末か文政年代始めに作られたのではないかと考えている。それは次に書く理由による。

閻浮提図の特長

閻浮提図が世界大相図等よりも先に書かれたとする理由は、この図の内容や思想が他の二図とはつきり異なっているように思えるからである。つまり、閻浮提図には円通上人の影響が非常に強く現れているのに対し、他の二図にはそれが希薄なのである。それには当然なにか理由があらう。室賀氏らの論文で円通上人の業績もよく理解できた。上人は西欧

からの新知識の普及により仏教が軽んぜられることを憂え、仏教振興の「護法運動」として「梵曆（仏教天文学）」を確立され、多くの著述をなされた。その際の方法論の一つは、仏典の記載を西欧の新知識と結び付け、仏説は西欧科学でも裏付けられたとして仏説の優位を説こうとするものであった。たとえば、地動説は「立世阿毘曇論」で既に外道の説として斥けられたものであると説く。アメリカやメガラキア（西欧の古い地図にある南極地方の大陸）を閻浮提付属の二中州になぞらえ、これらは西欧人に先立ち仏教者が発見したものと説くのも円通上人の発案だそうである。円通上人の閻浮提図にもこうした論理が随所に見られる。さらに直接的なのは、円通上人の「仏国曆象編」（二八一〇）に、上端に閻浮提樹を書き、その下に七層の森林と人間世界を書いた閻浮提図が載っていることである。ただし、人間世界の地図としては単に三角形をした陸地が書かれているだけである。

こうしてみると、先に円通上人のオリジナルとしたものが実は円通上人の直接的影響によるものであることが明らかである。まず、全体の構図がそうである。さらに、先号で紹介した、「仏典にある雪山以北の理想国は今のヨーロッパであろう」と想定する記載などは円通上人の方法論そのままである。また、閻浮提図にも「阿毘曇論」による地動説批判が載っている。いわく「外道はこんな説を説く。大地は常に動いている、と。それが本当なら前に投げた物が後ろに落ちるだろう。また、大地は下向きに落ちつつあるという。それが正しければ上に投げた物が落ちてくることはないだろう。また、日月は動かず大地が自転しているのものであるともいう。もしその通りならば矢を射つても的にあたることはい

だろう。このように地動説は古くからある。最近エジプト人が千年ほど前に説いた説だと言われているのは誤りである」。その他、地震、潮汐、雷鳴等について「正法念経」等の記載と科学的観察とをないまぜにした記載が閻浮提図をうずめているのである。

昨年八月号で紹介した「大海辺際は巨船といえども至るべからざる現証」という地球一周を否定した大変面白い文章、あれだけが原典不明である。新井白石から名譽毀損で訴えられかねない偽説なので存統上人のオリジナルとするのは申しわけない気がする。しかし、他の閻浮提図や須弥山図の作者が、須弥山説をとれば平面にならざるをえない閻浮提と地球説との矛盾に対してなんらの説明もなし得ないでいたときに、とにかく納得のいく説明をみいだそうとしたところに存統上人の合理的精神がうかがえるのである。

円通上人が京都をはなれて増上寺に住まわれるようになったのは文政六年（一八二三）のことであるが、それ以前にも度々江戸にでられ、江戸での弟子も多かったという。江戸時代の文化人が全国的に深い交流をもっていたことは想像以上である。江戸でもはやくから梵曆研究グループができており、存統上人もその一人だったのであろう。円通上人の「縮象儀説」（二八一四）には、次の文章が載っている。「近口属々吾党二大藏経中之説ヲ探テ閻浮一州ノ輿地ヲ著サント欲スル者有リ」この記載が誰を指しているかは明らかでないが、存統上人と見ても間違いはないと思う。とすれば閻浮提図の製作は文化十一年頃ということになる。それでは何故閻浮提図に文化五年との記載があるのだろうか。一つにはその頃にはもう大体の構想が固まっております、世界地図にどれを用いるかだけが懸案になって

いたのであろう。あるいは司馬江漢の図あたりが候補になっていたのを急遽いれかえたのかも知れない。それなら何故文化五年の字を残したのかというと、こうして発行年をぼかすことで、お上が公刊した図を勝手に使用したことに対するお咎めをまぬがれようとしたのではなからうか。そのため、問題の間宮海峡には「混同江」というまことに意味深長な名前を記載した、といえは小説的空想にすぎないだろう。

世界大相図との格差

それでは閩浮提図と世界大相図ではどう異なるか。一言でいえば円通上人的方法論、つまり、仏典の記載と西欧の新知識とを対比するやりかたが全く影をひそめてしまったのである。すでに紹介してきたように、世界大相図は仏典、とくに「俱舍論」に大変忠実である。胆部州の形も世界地図ではなく古い天竺図であり、猫牛州と勝猫牛州の位置も閩浮提図のそれとは逆になっている。西欧の世界観との比較は全くなされず、日月の運行等については曆象編にすべてゆずっている。

こうした古典への回帰は天竺図ではより明瞭である。室賀氏らによれば、存統上人の天竺図の内容は基本的には鳳潭上人の「万国掌菓図」と同じく西域記に基づいているが、「法顯伝」や清代の「西域見聞録」等のその後の著作を用いて詳細に考証し、誤りを正しているという。その一方、当時すでに入手可能であった西欧由来のインド地図については、全体の形を参考にする以外は一切無視している。そして閩浮提図ではただの小さな池として書

かれていた無熱惱池を再び北インドの中心におき、大河の水源である四つの動物の頭まで丁寧書き込んだのである。何度も書いたように、この図は実用的な地図ではなく全く宗教的な目的で書かれた一種の仏画なのである。

このような違いが何故おこったのだろうか。閻浮提図の作成から世界大相図の製作までの間に、円通上人の方法論に対する批判が存統上人に芽生えたのだとみるほかはあるまい。そしてこれは大変大切なことだと思ふのである。円通上人に対する仏教界からの非難はすでに当時からあったという。円通上人はたしかに護法の旗手であった。しかし、その、西欧の新知識を使って仏説の正しさを証明しようとするやり方は、それ自体矛盾をはらんでおり、ご都合主義との批判をまぬかれない。さらにそれは仏説に対する敬虔さをも欠いた行為である。それに、西欧の科学は宗教とは目的も方法論も全く異なっている。それは本来相互に比較するような性質のものではない。護法とはもっと純粹に敬虔に仏典に接するところから生まれるのではないか。存統上人はこうした反省をなされたものと思う。科学知識で仏典を安易に解釈したり、仏典の記載を不用意に世俗的な実用に供することとは、仏教を疑似科学におとしめてしまう危険をはらんでいる。後の佐田介石師の暴走を見ている私達にはそれが良く解るのである。存統上人は仏典にも西欧の新知識にも造詣が深く、また大変合理的実証的な考え方の人だったと思う。それだけ、円通上人と同じ方法論で閻浮提図を書いているうちにその矛盾、その危険性を深く体験されたのではなからうか。私は円通上人とは別の道を探ろう。そう考えられて円通上人からの脱皮を図られた。

そして数年以上の間において世界大相図が生まれ、天竺図が完成されたのではないかと考
えるのである。

むすび

大相図三幅対の成立については全く逆の見方をとることもできる。つまり、閻浮提図が
一番しまいに作られたと見ることである。現に存統上人の閻浮提図と全く同じ構図の「南
閻浮州細見図説」なるものが、近江の僧惠嚴によつてずっと後の弘化二年（一八四五）に発
行されている。（ただし、その世界地図は江漢より古い橋本宗吉の図、全体の書きかたもかなり杜撰で
ある。）しかし、このように考えると世界大相図等の製作意図が解らなくなるのである。な
によりも、閻浮提図には若い意欲と気負いがあり、世界大相図には円熟味が、天竺図には
老成と枯淡が感じられるのである。閻浮提図にある「世界大相図に書いたように」の字句
は、閻浮提図と平行して大相図の構想が進んでいたためと見ることもできようし、天竺図
の閻浮提図参照の字句は、上人にいずれ想を改めて閻浮提図を書きなおすつもりがあつた
と推富することもできよう。

宗教と科学のかかわりについては、生命科学や自然改造などの点で現在も難しい問題をか
かえている。世界大相図三幅対は、護法の一念に燃えた人が、宗教と科学の関係につい
ての方法に失敗と反省を重ねて作られたものと受け取りたいのである。そこに今、存統上
人を振りかえることの意義があると思うのである。

法 然 領 解 — 文 章 論 —



おお はし けん いち
大 橋 賢 一

ここ何年かは、こころに泌みる文章を求めているのであったが、結局、父の蔵書に帰った。父の愛読していた、吉田絃二郎「わが人生と宗教」そして田部重治「心の行方を追うて」。ことに最近、吉田絃二郎のなめらか（すぎる）ような行文よりも、田部重治の沈静な文章に傾いている。

——と、こう書き始めて、何となく時代錯誤の感なきにしもあらずなのだが、現代の文章、どこか私の琴線にふれてこない。もちろん、鑑賞眼のなさはあるのだけれども、かつての頃のように、小説の世界に没入することも少なくなつて、随筆の文章のほうが悪しく思う昨今、といつて、それもまた、心になうものに邂逅（めく）わぬ。

由来、私は、谷崎潤一郎や川端康成といった、唯美主義の作家に関心があつた。そしてそれらの作家は、いずれも文章の美的彫琢に

心を砕いたのであって、谷崎の「文章読本」や、川端の「新文章読本」がその一証だ。

就中、谷崎の悠揚せまらざる文章の余裕と、康成の哀切さは深く私の心に残り、今読み返してみても、しみじみと懐しさが泌みるのである。

一例を挙げれば、

此のあたりは山に近い上に木立が深いので日が遠く、まして黄昏時なので、冷え／＼とした空気が身に泌むのであったが、去年の落葉の積ってゐるのを掻き分けながら、母屋と覚しい建物の所まで行つて見ると、そこも今は廃屋になつてゐるらしく、格子が固く鎖してあつて、夕ぐれであるのに一点の灯も洩れてはゐない。

これは「少将滋幹の母」の終章、滋幹が叡

山より下山の途中、母に再会する場面の描写だが、句読点の位置を辿つて読み進めば、作者の息づかいも感じとれるごとくであり、まさに無駄がない。

また、川端康成では、次の文章を挙げたい。

……しかもその秋聲氏の密度がこの「縮図」では殊に新鮮と自由とを並存させてゐる。生き生きとして艶めかしくさへある。また秋聲氏の表現はこの最後の作品に來て真の高雅に達した。文章もよほど練られたらしく、「仮装人物」や晩年の短編に比べて一段と整備し、時に抒情的な調子を高めさらにさへ見えるほどだ。

（「小説の研究」）

康成の文章は簡潔さが一つの特徴だが、ここではその言葉の選びに注目したのだった。

新鮮、自由、高雅、抒情、まさに康成自身の文章（作品）の理想が語られていると、そう私は思ったのだ。そしてそれは私の文章の理想ともなったのである。

しかしまた、思ってみれば、谷崎の随筆となると、どことなく俗っぽく、康成の気韻が全く表われている作品を一つ選ばうとすると、なかなか思いつかない。さても文章のむずかしさよ、と思うのである。

私の法然領解も、ゆえに、文章に注目する。法然——領解であるから、もちろん法然上人の文章を中心に置く。そして、その領解文となる。領解文は、まず自身の文章となる。

その目標は、先述のとおり「ここに泌みる文章」だ。そのためには、まずもって谷崎の余裕と、川端の切実高雅を目指すのである。勿論、はじめからそんなことを念頭に置くべきではない。あくまで不求自得のものとして

だ。

では、求めるものとは何か、だが、それは最初から知れている。

法然上人の真精神、だ。

しかし、これほど、言うはたやすく、把握するにむずかしいものはない、と思う。——浄土宗人として——だ。なぜなら、現代はまさに、日本仏教としては、親鸞（思想）に席捲されている感あるからだ。したがって法然上人は、不当に（過少）評価されている。世人みな然りである。私の、その著書を通じて信頼を寄せている哲学者にして、然りなのだ。

私は、しかし、年来、親鸞を称揚する知識人を信じていない。（真宗人や信徒にではない。）なぜなら、過激で、観念的飛躍があるからだ。

往相・還相、全力が法蔵願力の廻向であるといつて、衆生の側の力を認めようとしないう。認めるとしても、自力根性だと貶してしまう。

だが、現実を認めつつ、理想へと導くのが
仏教の筈だ。苦・集・滅・道、その八正道は、
苦・集の現実の「あるべからざる」すがたを
認めつつ、寂滅の理想領域を目指す「向涅槃
道」なのだ。然るに、親鸞教、罪濁にまみれ
た現実を悲嘆するといいつつ、それを懺悔し
て清浄な領域を求めよう、との契機を「自
力」根性と貶すなど、まさに正直な態度とは
いえない。全部他力は観念的飛躍、とする所
以だ。衆生の向上心を無視しようとする点で、
現実には即していない。すなわち、一つの偏執
である。

古来、法然上人は調和した人格だとされる。
知・情・意が調和して円満。ことに最近では、
その意志の強靱さに注目されている。外柔内
剛ここにも調和が見られよう。

そのよって立つところは、「縁起・相依性」。
仏教の根本たる、相対性原理の体得、であ

る。従って、一念・多念の問題も、全く調和
されている。聖道・浄土の問題、言い換えれ
ば、自宗他宗の問題も、浄土宗の側から、穏
やかな解決がなされている。

しかも、実践面からして、仏教・無我の現
実否定の持続は、あくまで称名念仏の行を崩
さぬところに、その衣鉢を継いでいる。

法然上人は、確かに仏教の中核にあるのだ。
そういう、法然上人の積極的許価を謳う文
章は、寥々たるものではあるが、最近の宗門
には、確かにある。

法然における天台の超克止揚としての浄
土教的信仰の立場は、即の論理と階梯の
論理を包み、総合するものとしての、信
一行のダイナミックな関係を成り立たし
めるものであったが、幸西、親鸞等の立
場は、「一念義」ないし、信の絶対性、

完結性を一方的に強調することによって、かえって天台の「即」の立場への傾向が再び顕著となるに至るのである。(河波昌氏論文「浄土教的宗教体験における即の論理と階梯の論理」)

爾來、氏の文章の颯爽たる風には関心を寄せていたが、この文章などに至ると、積極的評価に加えて、沈静化が見られてきたように思う。

同様な趣旨をもつ文章として、

法然は……常に何をしても相対的な立場でものを見ておられる。

そこが実は親鸞との違いになってくるわけです。少なくとも、この立場は法然より親鸞へという思想の深化とみることにはできません。むしろ法然の場合は、矛

盾をかなり含んだ現実主義者というか、相対主義的にものを見ていって……矛盾は矛盾でよしというようなところが随所に現れます。……生活の一切が仏と凡夫、聖なるものと俗なるものの動的な緊張の上にある。そして新鮮な感激を生涯持続しよう。持続するところに仏の救済がいつでも保障されているのです。(石上善応氏「浄土教の地獄」——講演記録——)

氏の文章に見られる、一種の「優しさ」に惹かれるのだが、ここには、氏の専門である原始仏教に基づいた、法然上人の積極的評価がよく表われている。(ただ氏の文、息づかいを辿って行きにくい面がある。……)

四十三歳にして一向専修の念仏者となつた法然房源空は、もはや救われた人とし

て、ますます念仏の功を積み、宗教的境界を深かめて行つたと見なければなるまい。この点、信の面を深かめるだけで行の面を欠いたかに見ゆる親鸞聖人の宗教的境界に法然上人とは異質的なものが感ぜられる。(藤吉慈海氏論文「法然浄土教における救いの意味」)

やや遠慮がちにはあるが、(———)そう感じられる——法然上人の積極的評価がなされている。(氏の文章、送り仮名の点で気になるのだが……)

証空や親鸞の即便往生説や現生正定聚説は法然が説く臨終正念往生説を現生にとり入れんとしたものであるが、これは往生の本義を離れた擬装せる往生説であり……安易な現実肯定に墮すごとき現生往

生説は取りあげるべきではないと考えるのである。(坪井俊映氏論文「浄土思想の未来像について」)

年来、氏の文章は、私の視点に最も近いものとして受容。その潔いまでの批判精神に共感するも、そこに、根本仏教よりの見方を持て来たしては、との思いがある。

こうして私は、次に藤堂恭俊氏の文章を置く。

このように称名の人は、阿弥陀仏の光明・願力に摂尽され、照触することによって、貪欲・瞋恚・愚痴と言う三毒の身をあらため、持戒清浄の人、忍辱の人、智者となんらかわらない人に、生まれかわると言うのである。まさにこのことは名号の他に超絶した深勝な功德が、名号を

となえる人の心の奥行きをひらき、無限に深めたことを示すとともに、今まで煩惱に隠覆されていて、はたらきをみせなかった仏性が、その本来のはたらきをはじめたことを意味するであらう。それはなんとと言っても、仏子の誕生と言うほかない。(論文「法然上人における仏凡の關係」)

ことに、氏のこの文章には、柔らかなうるおいが感じられる。序論で述べられる「法相名目に始終するような宗学からの脱皮」が、いよいよ始まったかのようなうだ。ここにかけて、私は、上人領解に「高雅」を見つけ得た思いである。

しかしながら、『選択集』総結文「念仏の行、水月を感じて昇降を得たり」に「仏凡一体、入我我入」を見られること、まず「仏凡相依」と領解したい私との相違を感じる。

ともかく、氏の『選択集』(仏典講座)の刊行を待ち望んでいる一人ではる。

私の法然領解の文章遍歴は、こうして生涯続いていくのである。中には、峻烈岩のごとき文章も出現してこよう。また、清涼風のごとき、またあるときは、微風春のごとき温かい文章にも出会うことであらう。それら、それぞれ味わいを蜜とし、それぞれの息づかいを文章に読みとりながら、法然上人の真実にせまっていく外はない。

「願はくはもろもろの行者、一を執して万を遮することなかれ」(『選択集』付属章)

しかも、「諸行を廃して念仏に帰せしむ」(同)と言われる法然上人の自・他宗相對、また共「通」面と「別」立面の相對觀にも、法然真精神の鍵が潜んでいるのである。

木

下

隆

一

随

筆

集

24

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(10)—

木きの
下した
隆りゅう
一いち

それから急に蓮見小五郎は雄弁になり、私達親子を相手に長広舌を振るった。それは犬哲学とも言えるもので、延々二十分にも及んだ。小五郎の言とハチの行動を対照しながら私は聞いていた。多少違うなと思える点もあったが、大凡は領けた。

特に、「人間は、犬は人に懐き従うものだと思っているが、あれは大間違いですぜ。犬嫌いの人には絶対懐かない。人間は、あれがいいこれがいいと、自分の好みで犬を選ぶが、犬だって人間を選びますよ、いや選ぶ権利があるはずですよ。ところが人間がその権利を行使させないから、犬はいらいらが高じ、人間との間がぎくしゃくしてくるんですな。そんなのが、やがて噛みつき犬になる」というのには納得が行った。

「要はお互いに愛情を持って接することですよ」

そう言つて、小五郎は長広舌を締めてくり、「いやあ、少々喋りすぎましたな」

と、照れ笑いを浮かべた顔をつるんと撫でた。目尻に寄つた小皺が、人の好きを表していた。ハチは日向に居場所を移して蹲つた。

「ところでお兄ちゃん、お願いがあるんだけど……」

お兄ちゃんて、俺のこと？と小五郎を見返ると、

「うちの婿さん連れて行つてくれませんか、こちらはいつまでいても一向にかまわんが、先様に悪いですけんね。それにあんたのこの飯も食いたいらうし……」

小五郎の言葉には各地の方言と訛りが混り合つて、一種独特の味わいがあつた。

「いいですよ」

と、その時の勢いで私は約束したものの、紐もなにも持つていなかったから途方に暮れた。しかし、まあなんとかなるだろうと、薬塚から一本薬を引き抜くと、それをハチの首輪へ結びつけた。それがなんの足しにもならないことは、首輪へ結んだ私が一番よく知つていた。たかが一本の薬しべである。ハチが身じろぎしたただけでちぎれるのは目に見えていた。私にしてみれば、小五郎に対してハチを連れて帰る姿勢さえ示せばよかったのである。ハチは帰る帰らないは、ハチお前の自由意志だ。俺はお前の選択を尊重する／そんなことを念じながら、「帰るぞ」と声を掛けると、ハチは立ち上がつて、自分から歩き出した。

「あら、ハチ。お嫁さんに挨拶して行かないの、薄情な子だこと」

母が言うと、小五郎は雌のハチの膨んだ腹を撫でながら

「そろそろ雄を遠ざける時期が来たようですな」

と言った。

「犬ってやつは妊娠して六十日から七十日の間にお産をしますんでね。これもあと半月ぐらいでしょう。そうになると、いくら愛する婿さんと言えども寄せつけなくなる。ハチぐらい場数を踏んだ雄になると、その辺のことはよく弁えてますよ。離れるきっかけを待っていたんじゃないですか」

小五郎ははそう言って笑ったが、すぐ真顔になると、

「生まれたら是非見てやって下さい、ハチとハチの子を。きっと今度も可愛い子が生まれますよ、私は信じています」

「今度も、と言いますと、今までに何度か」

「ええ、これで三度目。子犬は引く手あまたでしてね」

どうやら小五郎は古タイヤを加工して雪駄紛いの履物の底を作る他に、子犬の繁殖も手掛けていたらしい。その他にも閤屋か担ぎ屋かそんな事をしていいるのではと思うと、私は急に連見小五郎が胡散臭い男に見えてきた。油断は出来ないぞ、と思ったのである。だが、

「お兄ちゃんもいい腕だねえ、この気難しいのを薬しべ一本で連れて行くんだから」
という小五郎の讃示は素直に受けとめた。もっとも、ハハチと俺とは愛情を持って接し

ているから、この程度の芸当は朝飯前さ」といふ思いをこめて、小五郎の目を見つめ返してはやったが……。

お宮の下から堀川町の家までは二十分足らずの道程だったが、ハチは私の歩度に合わせ、藁しべを切ることもなく歩いた。私は藁の先を転く指でつまんでいるだけでよかった。私は内心いささか得意であったが、端から見れば、さぞかし珍妙な道行であったことだろうと思う。その頃ようやく町に犬が増え始めていたが、殆どの犬がハチを認めると、すうっと姿を隠した。中には猛然と吠えかかるやつもいたが、ハチは全く意に介さなかった。一度だけ、そばまで来て吠え立てた若い犬を、立ち止まって一瞥すると、そいつは急に怯えた目付きに変わり、後肢の間に尻尾をはさんで、ヒューとかすかな悲鳴を上げて後退りした。貫禄の違いであった。学校で初めてハチが話題になった時、ハチを晩年の清水の次郎長に喩えた男がいたが、彼はこんなハチを見て次郎長を連想したのかと、私は納得した。

家の前で、私はしゃがんで丁寧なハチの首輪から藁しべを解いてやった。ちょいと引張れば簡単にはずれるのは分かっていたが、それでは折角ここまで我慢して私に付き合ってくれたハチに失礼になると思って、念を入れたのである。言わばこれはハチと私の間にだけ通用する儀式のようなものであった。

私が門の格子戸を開けてやるまでもなく、ハチは自分で作った潜り穴を抜けて、母が朝汲み替えておいたボウルの水をうまそうに飲んだ。そして、買物のために途中で別れた母

が帰ってくると、格子戸の内で尻尾を振っていそいそと母を出迎えるのであった。そこには通い番犬といった面影はなく、我が家の犬そのものの姿があった。

蓮見小五郎の真の職業が私に知ったのは、それから四ヶ月程経ってからであった。春祭ということ、三原の駅前から大踏切にかけての線路沿いに露店が立ち並び、近在からの人もあつて賑わっていた。その雑踏の中で、私は小五郎の姿を見掛けたのである。小五郎よりも先に、彼が飼っているハチを見つけ、ハチの動きを辿って小五郎に行き着いたと言った方が当たっているかも知れない。小五郎は小型の大幅帖のような帖面を手に、露店を一軒一軒廻ってショバ代を徴収していた。そんな小五郎を先導するように、ハチは一足先きに次の露店の前に佇み、小五郎がくると、また次の店の前に行つて主人を待っていた。正月、子犬を見に行つた時私に見せた柔和な目はどこにもなく、ハチは鋭い目をしていて、私が呼ぶと覚えていたのか、その時だけ優しい目をして私を見たが、小声で言い争う小五郎の声を聞きつけると、ハチは小五郎の足許へ飛んで行つた。一旦緩急あれば——という気概が、小柄なハチの体に漲っていた。

小五郎の背後姿を、何軒か私はついて廻つた。そして「小父さん」と声を掛けると、小五郎は振り返つて私を見たが、その目は全く見知らぬ人を見るような冷たい目であつた。このおっさんの商売はこれだったのか、俺が胡散臭さを感じたのは、当たらずと言えども遠からずであつたかと、淋しい思いで私はその場を離れた。

かなり経つて、西宮の知人宅へ届け物をして帰る私を、小五郎が呼びとめた。

「この前はごめんよ。悪かったと思ってる。でもなあお兄ちゃんよ、ああいうところで、堅気の衆が、それも学生さんがあつしらのようなものに気安く声を掛けちゃあいけません。あつしの本職は香具師^{カグシ}なのさ。現役は引退したが……。この辺を縄張り^{ツナヅメ}にしてる親方があつしの兄貴分^{ケイフ}でね、やめたいと言ったら、今の商売を世話^{セワ}してくれた。小学校を出てから香具師の道一筋^{ミチ}だったから、堅気の暮らしに憧れていたのは事実だが、きっかけを作ってくれたのがハチなんだよ。奈良県の桜井という古い町で拾った。我々の仲間内では神社仏閣の祭礼を高町^{タカマチ}と言うんだが、桜井の八幡さんの高町の帰りに、道端の草叢で鳴いていたのを拾った」

「八幡さんの帰りに拾ったのでハチですか」

「そういう訳だ。そうして今は八幡さんの下に住んでいる。これもなにかの縁だろうね」
「そしてハチの婿さんもハチ。末広がりで縁起がいいじゃないですか」

「うまいこと言うねえ。あんたは。それまで犬を飼う暮らしなんて想像もなかったが、あまりにも可愛かったので拾ってしまった。生後三十日ってとこだったかな。犬も飼ったら、そうそう家を空けられなくなってしまった。自然と腰が重くなって……。それに年だしね。で、この近辺で高町がある時だけ手伝っているんだよ」

「そうだったんですか」

「ところで突然話は変わるが、お兄ちゃん子犬を飼ってみたいか」

小五郎は意外な提案をして、私の度胆を抜いた。

◆◆◆新刊紹介◆◆◆

『江戸物語』

細田隆善／豊明／著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

● 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録／定価一八〇〇円

【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

江戸は全国総城下町

江戸は世界一の人口

江戸は日本の縮図

江戸で日本の富の半ばが消費

江戸文化の出現

△発行・発売▽ ノンブル社

東京都新宿区新小川町六一三九—七〇一
電話(〇三)二六九—一二九三 二六七—六六三七
振替(東京)七一〇九三／千一六二

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^く の 生 涯

(三)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ} 浦^{うら} 行^{ぎょう} 真^{しん}

続・廃仏毀釈の嵐の中で

廃仏毀釈^{きしやく}といっても、実態がどんなもので

あったか、現代ではほとんどそれを知る人はいない。多少の例をあげてしばらくそれを語ることにしよう。

「神仏分離」が強行されたなかで、もつとも

粗暴な例としてよく挙げられるのが、叡山東麓の坂本にある日吉山王社での廃仏毀釈である。

その主役を演じたのは神官・樹下茂国で、布告が出たのを知ると、「時こそ来たれ。今年来の宿憤を晴らす好機到来」とばかり、雀躍して立ち上がった。この背景には日頃、神職が社僧に抑えつけられ、こき使われてきたという事情があったことはいうまでもない。彼はすぐさま神殿の鍵の引き渡しを延暦寺に申し入れた。

延暦寺側ではこれをうけ、血気にはやる若い僧徒などはすっかり憤慨して、これまた殺気一山に満ち、といった有様。彼らは当時の天台座主が皇族だったので、その威をかりて樹下の要求をはねつけようという作戦に出、使者が神官側と延暦寺側を往復して談合すること数回におよんだ。

しびれをきらした樹下は実力行使を決意し、下級神職たちのほか、かねて語らっていた同志の壮士三、四十名に坂本村の人数数十名を加えて一隊を編成し武装させた。これが七社ある山王社の神域に乱入し、神殿の扉をこじ開けて殿内に殺到しご神体として祀つてあった仏像や僧像、経巻のほか仏具などごとくを外へ放り出した。

ついでそれらを二宮の社前に集めて土足で蹴り上げ、槍の石突や棒で突き砕くなどして氣勢を上げて鬱憤をはらしたあと、ついに火を放って焼き捨てた。その数百二十点と伝えられているが、大般若経六百卷、法華経八巻なども各一点に数えてあったそうだから、実際にはもっと膨大な個数にのぼったであろう。これらのなかには重要文化財的価値のあるものも少なくなかったと思われるが、当時の日本人には文化財などという観念は希薄だった

から、すべて烏有に帰した。その代わり右から左へカネになる金属品四十八点はみなで山分けして持ち帰ったと記録にある。その所業だけを見る限りでは、山賊とあまり変わらな

い。
先にも樹下が社僧にたいし深い恨みをもつていたと書いたが、じっさい僧侶と神職の不和には、歴史的なものがあつた。

その根本には、つねに僧が上にあつて神職がその下にいなければならないという、固定した上下関係があつた。これは一つには、徳川幕府が耶蘇教取締のために設けた寺請制度の産物でもあつたのである。この制度のために、神職も檀那寺を持たねばならないことになつて、下風に立つことを余儀なくされた。同じ宗教人でありながら、これは堪え難い屈辱であつたろう。

当然、神仏習合の社においては経済も僧に

厚く神職に薄く、神職はおおむね困窮の生活を強いられた。そればかりかその関係は日常の瑣末なことにもおよんで、僧側はいつも威張りちらし、神職を軽侮するという悪習を生むことになつてしまつた。

たとえば京都の北野神社では祭のときに社殿で、社僧が神職のすわる場所に灯油を流しておいて、その白衣がよごれるのを面白がり、神職にとって重要な儀式の道具である櫛をわざと倒しておいて困るのを興がつたりしたという記録が残っている。

これは何も北野神社に限らず、全国の神仏習合社においては、日常的に見られる現象であつたらしい。そのため信濃の諏訪神社においても、神職は社僧との同座をもっとも嫌つたという記事があるほどである。

人間は共通の大きな利害問題にぶつかったときは、ふだん反目しているグループ同志で

も決して争わない。むしろ協力して解決にあたるものだが、離反や憎悪が増幅するのはおおむねこのテの瑣末な不愉快事の積み重ねで、その溜まったストレスはちょっと切っ掛けがあればすぐ爆発する性質のものなのだ。樹下が神仏分離令を知って「時こそ来たれ」と叫んだ気持は、そういう意味でよく理解できたし、仏像仏具類を破壊したときは、多分に動物的心理に近かったろうけれども、それこそ胸のすく思いをしたに違いない。これをみるとき、あながちに神職側のみを責めるわけにはゆかないものがあつたのである。

ところで、もともと「仏」でありながら「神」のものにされてしまった例もある。琵琶湖八景の一つ、竹生島の弁財天がそうであった。

滋賀の大津はもと幕府領だったため、維新とともに新政府が没収して大津県庁をおいたが、その県庁が、竹生島の弁財天を浅井姫尊あさいのめいことと一方的に決めて、乱暴にも神社にしてしまったのである。役僧たちはびっくりし、「仏像の弁財天を神社にしてしまつては、かえつて神仏混淆こんぶくようになりませんか。はたまたこのたびの神仏分離は敬神が目的で、廃仏毀釈が趣意ではないと承知しておりますが……」と抗議したのは、当然というものであろう。

このときの大津県庁の返答が、ケツサクなのである。

「……たとえ仏像たりとも皇国に安住するからには皇国固有の神であつて、これまで弁財天と称したことが誤りなのである」

と一発、横車を押しておき、ついで、

「それをかれこれ言うのは朝敵も同様というもの。明治初年、坂本の山王社の仏像仏具を

焼き捨てた先例もあることを忘れるな」

と脅しにかける。

「たとえ白を黒と仰せられようとも、朝廷の仰せに背くことは出来ず」

と責任を新政府にすり替えておいて、

「その方らさほどまで仏法を信ずるならば、元来、仏法は天竺てんしゆくからきた法なれば天竺国に帰化すべし」

とくる。そして最後を、

「いま県庁より達する通りお受けせざれば、いかなる処置になるやも知れず」

左様心得ると、ふたたび脅迫で結ぶのである。ここまですれば馬鹿々々しさを通りこしてもはやブラック・ユーモアの域に達しているが、廃仏毀釈がいかに低級な精神で実施されたか、これでおおよその察しがつこうというものである。

竹生島のようなデタラメさはないが、本来

の寺院が無理やり神社にされてしまった点で相似するものに、伯耆はくきの大山寺おほやまにがある。

大山寺は僧金蓮が養老年間（七一七～二四）に地藏菩薩を祀まつって開創したのが始まりで、天台宗に属した。のち大神山神社と習合し修験道の霊場として栄えたところだが、文獻・歴史・慣習など、誰がみても寺院であることは明白だったのだが、鳥取藩の神社取調掛小谷融（注3）なる者が独断で祭神を大山祇命としてしまい、「これまでに貯めた米やカネならびに所有の器物に至るまで、ことごとく神官に引き渡せ」という藩命を発令したのである。

仰天したのは大山寺側で、由来や歴史などをつぶさに書き記し、さらに一切合財を神社側に渡してどこか遠くへ行ってしまうではたちまち路頭に迷う旨を付記し、「われわれも同じ皇国に人民というのに、千百年相続の住居を取り上げられ、仏堂も子坊も滅却とな

つては進退ここにきわまり、血涙やみがた
く」と愁訴におよんだけれども、小谷がニベ
もなく拒否し、ついに立ちのくはめとなつて
しまった。

ただし嘆願書がきいたのか、破壊したのは
神社側か僧侶側かどちらとも判定のつかない
ものだけで、はっきりと僧側とわかつている
仏像や仏具をはじめ建物、器物などはすべて
処分を僧徒にまかせた点が、いくらか他と違
っていたといえようか。それで一時は「大山
物」と称する骨董品が古物屋の間で有名にな
ったという話が残っている。

しかし僧たちは大山寺の復活をあきらめず、
その後もずっと運動をし続けた。その悲願が
かなって現在のようになったのは、明治も三
十六年になってからのことであつた。

神社と無関係に、分離令に便乗して寺院の
廃棄統合を行った例では、信州松本藩がよく
あげられる。激しさも指折りながら、藩主み
ずからが率先して実行したという点でユニ
クだったからである。

松本六万石は戸田家である。ここは維新当
時の藩主光則をはじめ大参事（家老級）までも
水戸朱子学の信奉者であり、その下の小参事
二人がまた国粹主義者ときたから、神仏分離
令はまさに好機となつてしまった。すなわち
藩主みずから戸田家の菩提寺や祈願寺を取り
つぶし、改典掛という役職を設け、全藩あげ
て仏式による葬儀を廃止して神葬に改めさせ
たのである。

藩主の菩提寺・全久院の和尚はこれに抗議
してその迷妄を建白したけれども、藩主の拒
否にあいやむなく本尊と開山像を奉じて郷里
・越後に帰り、一寺を建立して護持するとい

う始末だから、他は推して知るべしである。

結局、松本市中二十四カ寺のうち二十カ寺が廃され、藩内全体では浄土宗三十カ寺のうち二十七カ寺が、曹洞宗は四十カ寺のうち三十一カ寺が、真言宗は十カ寺、また日蓮宗は全部で四カ寺しかなかったけれども、その四カ寺全部がつぶされてしまった。ただ妻帯公認の真宗だけは住職以下、寺生まれで、ほかに住むところもないという理由で、八カ寺のうち一カ寺だけの廃止にとどまった。

仏像仏具がすべて燃やされたことはご他聞にもれない。墓や供養塔、巡礼塔などはいずれも地中に埋めるか、堤防や石垣、溝の下積みとなる運命に見舞われた。

この藩主率先の徹底した廃仏毀釈は問題になりかけたふしもあるが、明治四年七月の廃藩置県令で、戸田光則自身が東京へ引っ越してしまったために、結局ウヤムヤになったと

伝えられる。

いずれも似たりよったりの廃仏の中で注目引くのは、薩摩の島津藩であった。

ここでは神仏分離令よりもずっと早い慶応元年、すでに家臣からの「寺院も戦時には軍事に転用すべきである」という建言が採用となり、調査掛なるものが設置されて廃寺の具体案が練られていたのである。

それによると領内の大小寺院総数千六十六カ寺、僧侶総数二千九百六十四名という数字が記録され、このうち十八歳から四十歳までの者は兵員に、学識ある者は教員に、その他農工商など好きにまかせる者、老年にして扶養料を与える者、というふうになんと区分けができていた。そこへ、神仏分離令が出たのである。廃仏毀釈の風潮が全領内に広がる

のに時間はかからなかった。

折しも明治二年三月、藩主島津忠義夫人照子が逝去したが、藩ではただちにこれまでの仏式でなく、神式による葬儀を発令し、歴代藩主の廟号もすべて神号に変え、僧侶は一人残らず還俗させられてしまった。もちろん仏葬は禁止である。あと、仏像や仏具の焼却その他は型のごとくだから省くとして、薩摩半島の南西端にある坊津の一乗院は、昔から薩南の美術館といわれるくらい仏像・仏器・書画の多いことで有名な寺院だったが、廃仏の嵐にすべて吹き散らされてしまったという一事だけは、記しておこう。

薩摩藩の廃仏毀釈は徹底していた。筆者は、同じ薩摩半島の内陸部にある知覧町の歴史館で、細工巧みに阿弥陀仏を埋め込んだ柱を見て驚嘆したことがある。見たところは何でもないただの柱なのだが、寄せ木細工のように

なった表面の小片を組み合 わ せ 的 に ス ラ イ ド さ せ る と、中から阿弥陀仏が現われる仕掛けになっているのだ。隠れ吉利支丹の多い九州だからできた細工だったかもしれない。^(注1)

とはいえ、こうした熱心な信者は、なにも九州に限ったことではなかった。全国に散在した。それは明治四年に三河の大浜で起きた、廃仏毀釈に抗議する数百人の騒擾^{（さわう）}や、翌五年に信越地方で起きた民衆の蜂起、六年の越前^(注5)三郡を舞台にした暴動などでも察しられる。もちろんその中心に僧侶がいたことはいうまでもないが。

明治政府は、全国を吹き荒れる廃仏毀釈の嵐を、初めはほとんど傍観のかたちで見過ごしていた。例えば知恩院をはじめとする各宗から続々と出てくる真意伺いや嘆願書には、

判で押したように「決して廃仏廃寺は趣旨ではない」と返答する一方で、各藩各地方からの廃寺処分にかかる伺いには、調査一つするでもなく、ほとんど無条件で「伺い通りしてよろしい」と許可するといったぐあいである。そしてその実施の苛酷さにたいして、当の各住職はもちろんのこと、本寺本山や檀家、法類から愁訴嘆願がきても、経過報告を求めて監督したり指導したりするわけでもなく、むしろ無視して、各藩担当者の自由にまかせるといふ粗雑な行政ぶりであった。

王政復古を支える中央官僚には国学者が多く、彼らの立場からすれば、寺院廃合はむしろ歓迎すべき事態であり、黙過するのが好都合であったのであろう。

そうした政府の態度が変わってきたのは、明治三年十月二十七日に突如として強行された富山藩の廃仏毀釈事件が、直後の動機にな

ったといわれている。

このケースはその凄味において、廃仏毀釈中の白眉ではないかと思われるのだが、「一宗一カ寺に統合する」と発令したのが二十七日。同時に兵を要所に配置して、各寺院が本山や檀家と連絡する途を絶つ一方、兵卒に大砲を引かせて市中を巡回させ、反抗する者あらば撃ち殺すという武力を誇示した。これで見な恐れをなし、文句を言う者など一人もおらず、領内の各宗寺院総数千六百余カ寺を、たった七カ寺に合併することについての合意取付けを、二十八日中には完了してしまつた。

習日からは、寺の打ち壊しである。その土ぼこりの中、人夫たちが梵鐘や金仏をせつせと城中へ運搬するという騒ぎだ。鑄つぶして銃砲の材料にしようというわけである。あたりの呼吸は第二次大戦下に行われた、ナチス

のユダヤ人狩りの縮刷版みたいなものといつていいだろう。

これでもっとも困窮したのは、真宗だった。千三百二十余カ寺が一カ寺に集合し、しかもそれぞれ妻子がいるのだから、納まりのつきようがなかった。

しかもこの弾圧を、藩は中央政府に無届けで強行したのである。政府は、わざわざ上京してその苛酷さを訴えにきた真宗の一住職渡辺法秀の陳情をうけ、さらに各宗本山から続々と訴えが出るに及んで、民衆の怨嗟の声も高いことに気づいた。それは新政府の一ばん恐れていることだったので、それを契機に政府は、寺院廃合に全国的な基準を設けるなど、急速に慎重な態度となつていったのである。

それには官制も、所管が神祇太政官から大蔵省、民部省、教部省へと点々とし、その間に、いわゆる国学的色合いの強い担当官がし

だいに淘汰され、代わつて仏教に理解のある者が増えていったという事情もあつたとされている。じつさい、国学派や水戸学派のいう祭政一致ないし王政復古などといったアナクロニズムで、近代政治の幕が開けられるわけもなかった。

仏教側は神仏分離令とそれにつづく廃仏毀釈の潮流を、晴天のへきれきの思いで迎えた。幕末の風雲急をつげるのを見て、誰しも一種のキナ臭さは察知していたろうが、まさか新政府のスタートともに、こんな形で狙い玉が自分の方へ飛んでこようとは思つてもみなかったのである。

意志の弱い坊さんは前途を思つて僧を廃業し、利害を計るのにさとい坊さんはさつさと還俗するというふうで、僧侶だった人の生き

方にも、当然ながら千差があった。

というのが、必ずしも民衆のすべてが仏家の肩をもったわけではなかったからである。

たとえば現代からではちょっと信じられないことだが、寺への付け届けが不十分だったりするとその檀家に圧力を加えたり、布施が少ないといつて葬儀を遅らせたりという記事が、江戸時代の記録にしばしば見えるところから、庶民の間に排仏の思想をかもす下地が十分にあったことが、思われるのである。

東京・回向院の住職だった福田行誠^(注1)は、全国に広がりつつあった廃仏毀釈の火の手を見すえつつ、東京における「諸宗同徳会盟」のリーダーの一人として、仏教界の危機克服に身を賭する決意を固めたばかりだった明治二年（一八六九）、『釈門新規三策』を書いて、同じ桑門にある人びとに警鐘を鳴らしたが、その中で彼は当時の情勢をつぎのように分析

しているのだった。

(つづく)

(注1)

徳川幕府がキリシタン防止のため、各寺院にその者が檀家であつてキリシタン信者でないことを証明させた制度。

このため庶民は必ず一檀那寺に所属しなければならぬことになり、檀那寺は檀徒の婚姻や旅行、就職、移転などには宗旨手形を発行するなど、一種の戸籍事務を扱う機関を兼ねることになり、幕府の庶民支配に重要な役割を果たすことになった。岡山藩では檀家制度の弊害防止や僧侶淘汰、寺院整理のため寺請証文を廃して神職に担当させたが、これはきわめてまれな例外だった。

(注2)

神官自身も自分の葬儀を仏式でしなければならなかったが、神職もしだいに目覚めて運動し、享保頃（江戸中期）から神職当人と嫡子に限り神式を許される例が増えてきた。

(注3)

小谷融は本居派。

(注4) 薩摩藩ではすでに戦国時代末期ころか

ら、同じ仏教各宗派の中でも真宗(一向宗)を目の仇にし、禁圧していた。

それは島津家が薩摩・大隅・日向三國で支配権を拡張していった時期と、真宗の教線が南九州に入ってきた時期とが一致しており、しばしば門徒衆によって謀報活動をされたことが動機になっているという。ことに秀吉の九州征伐のさい、その傾向が著しかったことによるといわれる。柱の中の隠し仏も、隠れ吉利支丹と両々あいまって培われた技術だったかもしれない。

(注5) この三件の暴動はいずれも明治政府の

仏教政策が慎重になって以後に起きた。それは三河騒擾は菊間藩担当役人が平田篤胤の弟子で、中央の訓令を無視し過激な廃仏処置にでたのが原因であり、信越地方の農民蜂起は戊辰戦争敗残の旧会津、庄内藩士が廃仏毀釈で動揺す

る農民を扇動して起き、また越前三郡の暴動は門徒衆が高札に「東西両部の名号を廃し」とあるのを、東西は両本願寺、名号は念仏と誤読して起きたものだった。

(注6)

富山藩の廃仏毀釈推進者は林太仲で水戸学の末流という。

(注7)

福田行誠(一八〇六—一八八八)武蔵国豊島(現東京都豊島区)生まれ。江戸小石川の伝通院で得度。のち回向院、伝通院住職をへて増上寺法主、知恩院門跡・浄土宗管長に。宗内外の学僧について浄土学のほか広く仏教を学び奥義を極めた。明治の廃仏毀釈には俊英の各宗僧侶と諸宗同徳会盟(東京)を起こし護法に挺身した。日本仏教史の堅確かつ該博な研究で知られる辻善之助は、廃仏毀釈と闘った諸宗同徳会盟の「精神的盟主はまさにこの人」と評している。

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。が、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十五巻 三月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成元年 二月二十五日

平成元年 三月 一日 印刷 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

◇ ◇ ◇ 新刊紹介 ◇ ◇ ◇

寺内大吉のライフワーク

寺内大吉 著

『立ち止まるな善導』

歴史像でとらえた念仏者・善導!!

法然「偏に善導一師に依る」、親鸞「善導独り仏の正意を明かせり」。日本浄土教に決定的影響を与えた中国唐代の念仏僧と時代背景を描く——好評の本誌連載の長編!!

A5変型 四七四ページ 定価一八〇〇円

《発行・発売》

毎日新聞社

〒100-51 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

TEL (03) 2211-0311

第五十五卷

三月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
平成元年二月二十五日印刷 平成元年三月一日発行